

明治文学における『浦島説話』の再生

―露伴、鷗外、逍遙を中心に― (一)

小 倉 齊

一 明治の文学者たちと『浦島説話』

〈明治の文学史で回顧される三人の何かの形で大きい作家は、つひにこの国民の伝説人物を彼らの文芸の外におかなかつた。さうして彼らは浦島太郎を描いたことによつて、ある程度彼らの詩人としての真価を競演した感じもする〉(『仙人記録』―『民族と文芸』ぐるりあ・そさえて、一九四一・九)と述べたのは、保田與重郎であつた。¹⁾保田の言う(国民の伝説人物)〈浦島太郎〉を描いた作品とは、幸田露伴の「新浦島」(『国会』一八九五・一・三一―三三〇)、森鷗外の『玉篋兩浦嶼』(『歌舞伎発行所』一九〇二・一二)、坪内逍遙の『新曲浦島』(早稲田大学出版部、一九〇四・一一)のことである。保田は(明治の代表的傾向の三人の作者が各々浦島を描いたのは興味深い。今日の作者にはかゝる勇気がないからである)とも述べている。浦島を描くことがなぜ(勇氣)のあることなのかは判然としないが、露伴、鷗外、逍遙がそろつて浦島説話を題材として作品を書いたことは、単なる偶然の一致とは考えにくく、確かに興味深い事実である。しかも、明治期に発表された他の作品の中にも浦島説話に材を得て書かれたものがいくつか存在するという事実

に注目するならば、明治文学における『浦島説話』の再生について考え、その典型として露伴、鷗外、逍遙を取り上げ

ることは、意味があるのではないか、と思われる。

たとえば、風籟子の『龍宮黒貝夢物語』（風籟舎、一八八〇・一〇）は太平洋下の理想境たる龍宮城に黒貝（国会のもじり）制度の整った理想社会がある、というSF的政治小説である。ある日、フランス革命やアメリカ独立戦争の本を読んでいた風籟子は、新旧時代の交替の空しさを憤り嘆き、鬱鬱として煩悶にたえなくなってしまう。何か心を安らげるものはないかとあたりを見回し、眼に入ったのが浦島太郎の古写本。さっそく読み始めると、ついつい物語の面白さに引き込まれ、自分も亀の背中に乗って龍宮城へ行ってみたいものなどと、たわいもないことを考え始めた。やがて、ハッと気が付いてみると、いつのまにか見知らぬ浜辺に立っている。すっかり途方に暮れていると、そこに現れたのは浦島太郎。風籟子が、ぜひ龍宮城を見学させて欲しいと頼むと、太郎は彼を太平洋の底にある夢想国の首府豚犬に案内してくれた。龍宮城はこの豚犬にあるという。豚犬の町を歩いた風籟子は、町の様子が噂に聞いていた龍宮城とはずいぶん違うことに戸惑う。道の両脇にはガス燈が立ち並び、レンガ敷きの道には人力車が走り、鉄のレールの上を汽車が走る、といった具合で、いたるところ文明開化の波に洗われている。聞くところによれば、長い間太平の夢をむさぼっていたこの夢想国に外国船が訪れ、開国を迫ったのは数年前のこと。その結果、王政復古が実現し、夢想国の新時代が始まったのだという。きわめて単純なストーリーながら、当時の日本をコピーした夢想国を通して当時の政治・社会を徹底的に風刺することに主眼があったと言える。

このほか、幸堂得知の『浦島次郎蓬萊漸』（春陽堂、一八九一・一二）は、浦島説話を転用して浮世の欲を説き、蓬萊に場を借りて欲界の茶番を描きながら、西南戦争を背景として（黄金の外に蓬萊なし）という落ちがつけられている。

また、仮名垣魯文には「三条の教憲」（一八七二・四、教部省発令）の趣旨普及をめざした宣伝文学とも言うべき『新話 蛸入道魚説教』（存誠閣、一八七二・六）がある。この作品は、龍宮王が、文明開化の時勢にかんがみ、龍宮界

も文明開化に進むべきだと魚類に訓示するところから始まる。

汝等聞かずや方今人間界六大洲中の各国競ひて旧弊を一洗し文運を隆盛にし理学を研究し政令を改革し發明を一新し文明開化の域に臨み君民一和して国を護り知覚をひらき知識を博め従事に進歩の最中と聞けり抑我浮漂の洲遠く人界を隔て深く海底に自立し人倫魚鱉の異なるあれは所謂局外中立の方を守りて人界の開化を高海で見物せんに豈妨げの有るべからんとへ思へども（中略）殊東南に太平洋西に大西洋の二大海あり其海底の各龍王疾くも人界の開化を聞知り各龍洲に古陋を改め海化に進む時に至り我浮漂洲のみ安閑と海中に孤立せば版図忽地隣境に併合られんこと必せり

この訓示によって魚類は開化の道を開くべく努めるというわけだが、結局この作品は、初篇のみの刊行で、二、三篇は予告されたものの未完に終わった。

以上挙げた例は、いささか安直に浦島説話を転用したさらいはあるが、開化期の日本を龍宮に見立てる意識の中に、当時の人々の時代認識の一端をみることもできそうである。

ところで、島崎藤村は『落梅集』（春陽堂、一九〇一・八）第四篇の二番目に「浦島」と題した詩を収め、人界に来た浦島と生活する乙姫、激しい情熱に支えられた強い意志を持つ乙姫を登場させている。

浦島の子とぞいふなる

遊ぶべく海辺に出でて

釣すべく岩に上りて

長き日を糸垂れ暮す

流れ藻の青き葉陰に

隠れ寄る魚かとばかり

手を延べて水を出でたる

うらわかき処女のひとり

名のれく奇しき処女よ

わだつみに住める処女よ

思ひきや水の中にも

黒髪の魚のありとは

かの処女嘆きて言へる

われはこれ潮の児なり

わだつみの神のむすめの

乙姫といふはわれなり

竜の宮荒れなば荒れね

捨て、来て海へは入らじ

あ、君の胸にのみこそ

けふよりは住むべかりけれ

人界に来て浦島と生活する乙姫、という設定は、すでに近松門左衛門の「浦島年代記」に現れている。ただし、「浦島年代記」の場合は（一度我名を現しては、此土にては人間の交りは叶はず）と結局龍宮へ帰っていくのに対し、藤村の場合は（竜の宮荒れなば荒れぬ）と龍宮を捨てて浦島との愛情にのみ生きようとする。いわば、自らの意志で自らの道を選び他を顧みない強い乙姫なのである。そしてそこには、たとえ幸福であっても所詮夢幻でしかない仙境を否定し、苦しくともこの現実の社会で愛を貫くことを貴しとする藤村の恋愛観の一端が現れている。

さらに、「竹取物語」や羽衣伝説などの古来からの他界にあきたらず、現実界を支配する美妙の想界、神と大魔王とが争う大世界を望んでいた北村透谷は、その日記「透谷子漫録摘集」（星野天知編）「透谷全集」文武堂発行・博文館発売、一九〇二・一〇）の「一八九〇（明治23）年八月四日の項で（西行伝成りたらば「再来浦島」こそ其次ぎに取懸るべきものならぬ、第一来着。第二世の変遷。第三今の恋昔の恋。第四古往今來の小歴史。（中略）「再来浦島」は明年を以て成り」と記し、また同じく八月十三日の項では（浦島）浦島は奇異なる生涯を送れる者なり、釣に往きてむすびくひける時魚か、りてあはてふためきむすび投げ捨て、けるおかしさよ、魚も得ずむすびひすてるおろかさよ、魚は逃げむすびは砂に達磨様云々」とも記し、浦島説話への並々ならぬ関心を示している。作品として結実しなかつた以上、こゝとさらに取り上げることは慎むべきだが、嵯峨の屋おむろの「夢幻境」に言及しつつ、（我邦理想詩人の前途豈に惘然ならざらんや）（他界に対する観念）——「国民之友」一八九二・一〇・一三、一〇・二三）と述べ、やがて（想世界と実世界との争戦）（厭世詩家と女性）——「女学雑誌」一八九二・二・六、二・二〇）を宣言する透谷が、現実界とは異

なる想世界を想定しつつ浦島説話への関心を示したことはほまちがない。

ここに挙げた例は、明治期の文学者たちにとって浦島説話あるいは浦島的なものが看過できないテーマであったことを十分に物語っている。明治文学あるいは日本の近代文学の誕生期において示された浦島太郎あるいは浦島説話の再生にはどんな意味があったのか。

先走りして言えば、明治文学はその精神世界の内部に△超越的なもの▽を呼び込もうとして蓬萊Ⅱ神仙世界を蘇らせようとしたのではないか、ということだ。つまり、キリスト教的な天上観はもちろんのこと、仏教的な地獄・極楽の他界観にも同調できなかった△精神▽が△土俗として、何か大そうな力で個人の血の生理の中にさへ△（保田與重郎「仙人記録」）染み着いており、民族の深層にある山中他界・海中他界のイメージを顕在化させ、それが明治文学の大家三人に代表されるような浦島説話の再生につながったのではないか、ということである。

透谷は『蓬萊曲』（養真堂、一八九一・五）の序において△蓬萊山は大東に詩の精を迸発する、千古不変の泉源を置けり、田夫も之に対してはインスピレイションを感じ、学童も之に対して詩人となる、余も亦た彼等と同じく蓬萊嶽に對する詩人となること久し」と述べているが、蓬萊山³が内的自我の世界、想世界の比喩であることは明らかだ。そして、山中他界観をベースとした神仙世界を舞台にして、インスピレイションを感じ、詩人として相対していこうとするところに、明治の文学者達にはほ共通する無意識下の△他界観▽でも言うべきものが現れてもいるのだ。

明治維新を考へるとき、革新が復古であり、復古がそのまま革新であるという理念の下に推し進められてきたことを無視するわけにはいかない。そしてそれが、現実の政治や社会によって裏切られたとき、文学の世界では現実世界から想世界への退却が行われ、内的な自我とか恋愛といった△超越的なもの▽が希求されたのである。透谷はそうした△超越的なもの▽を激しく希求した文学者であるが、それが蓬萊・神仙世界という意匠をまもって実現されたことは興味深

い。革新Ⅱ復古という明治維新の理念が想世界において実現された典型が透谷だったとも言えよう。

明治文学の△他界観▽が明治以前の日本人の精神世界と連続した線上にあることは言うまでもない。その時に最も大きな影響を与えたのは、△霊の行方の安定（シヅマリ）▽をその国学の基礎に据えた平田篤胤などの考え方だったのではなからうか。

（日本の近代を特徴づける出来事のひとつは、外国というかたちの強力な空間的異界が出現したことである）とする百川敬仁は、江戸末期から明治にかけての異界の喪失の危機と復活という状況について、次のように述べている。

江戸期には大衆の生活の次元で民俗的想像力の伝統にもとづいて、都市にも村にも小規模な空間的異界が「川向こう」や「近隣の山」といったかたちで存続していたのだが、そうした大衆の共同性をすくい上げ思想化しようとする試みは篤胤などを別として一般的には見当たらず、都市化が進行する過程で異界が内面化・時間化し、大勢として異界そのものは衰微に向かっていたと言つてよい。（中略）

しかしこの段階で、外国の圧力によって強制的に開国させられるという事態が生じた。民族の精神的な外傷体験にも比定されるこの出来事（岸田秀『黒船幻想』一九八六年、トレヴィル）は、つまり日本が民族国家として初めて「外部」あるいは他者に出会ったという意味をもっている。これが欧米の列強各国を異界と見なすようになったということだ。こうして一度は衰えつつあった異界が、いまや外国という空間的異界の姿をとって——やがて多くの問題が生じるゆえんだが——息を吹き返したのである。（『物語』としての異界』砂子屋書房、一九九〇・一）

この後百川は、近代において「新国学」の建設をくわだて、平田篤胤のあとを継ぐかたちで一貫して民俗的異界の問題に執着した存在として柳田国男を取り上げ、『遠野物語』の想像力が篤胤的な異界への関心として現れていると指摘する。とくに、『遠野物語』における（山人）への強い思い入れに篤胤的異界を近代化するというモチーフを見ようと

いうわけだ。

篤胤が「霊の真柱」（一八一三）で述べた死後の世界すなわち△幽冥▽は、祖霊神が村落内の山に宿り、子孫の守護神となるといった日本の民俗的信仰に近いものだった。篤胤によれば、人は死ぬと△黄泉の国▽ではなく現世と連続する△幽冥⁴（冥府）▽に行き、そこで現世の続きのような生活を営むことになるという。

その冥府と云ふは、此顕国をおきて、別に一処あるにもあらず、直にこの顕国の内いづこにも有なれども、幽冥にして、現世とは隔り見えず。故もろこし人も、幽冥また冥府とは云へるなり。さて、その冥府よりは、人のしわざのよく見ゆるを、顕世よりは、その幽冥を見ることあたはず。（『霊の真柱』——『日本思想大系』50 平田篤胤 伴信友 大國隆正』岩波書店、一九七三・九）

より具体的には、死者の魂はその葬られた墓の付近にいつまでも留まり、ほどに応じてやがて皆△神▽になれるというわけだ。あらたな異界の発見。それを個人的夢想からでなく、土俗の昏き闇のなかからつかみとろうとしたのが平田篤胤であった。彼は儒者が意識的に排除しようとした異なる世界への関心を自らの思想の根底に据え、そこから神話の再構成さらには宇宙論へと広がる一つの神学体系を構築する。鬼神の存在を確信し、靈魂の救済を切望しつつ。したがってそれは、地獄・極楽を説き、彼岸と此岸との隔絶を語る仏教的な思考に対して、きわめて素朴な思考と言うべきであり、篤胤は自らの△霊の行方の安定▽を求めて、そうした民俗の信仰の根、土俗の昏き闇へと向かったのである。

明治の文学者達が再生させた蓬萊△神仙世界が、篤胤が発見し、獲得した△民俗の根▽と称せられるものにつながっていることは、まずまちがいない。そしてそれが、西欧近代の精神文化との接触、交差によって生み出されてきたことも、ほぼ自明である。

露伴、鷗外、逍遙が浦島説話に材を取って作品を書いたということは、明治文学における一つのトピックでしかない

が、そこでなされた蓬萊^Ⅱ神仙世界の再生には、東洋的な^Ⅰ超越の世界^Ⅴの再発見という要素、日本的な民俗的他界観の再生という要素、さらに内的自我の比喩としての要素が混在しており、それはそのまま、明治という^Ⅰ普請中^Ⅴの時代の様相を浮き彫りにさせることにもなる。と同時に、西欧近代の精神文化との接触、交差がもたらした^Ⅰ外的他界^Ⅴの喪失という精神の状況をも垣間見させてくれるのである。

鷗外、漱石が十九世紀末の西洋の現実に触れ、そこで何らかの挫折や幻滅を体験して帰国したことは確かだ。彼らはそこで、西洋という^Ⅰ外的他界^Ⅴを喪失したのである。そして、明治という時代は、ほとんど国家的規模で^Ⅰ外的他界^Ⅴの喪失が進展した時代であった。その結果、明治の文学者達は、自らの内部に他界を求めることを余儀なくされたのである。そしてその現れ方は、露伴、鷗外、逍遙の浦島説話への拘泥とか、透谷の蓬萊の発見という形のみにとどまらず、広津柳浪の悲惨小説や松原岩五郎の「最暗黒之東京」、横山源之助の「日本の下層社会」が目指した、日本が内部に抱え込む^Ⅰ暗黒世界^Ⅴの探求という特殊な形をもとることになる。

さて、本稿では、以上述べてきたことを前提として、幸田露伴、森鷗外、坪内逍遙を中心に、明治文学における^Ⅰ浦島説話^Ⅴの再生の意味について考えることにする。

注

(1) 保田はこのほか、〈仙人とか詩僊といつた観念は、日本の文化の血脈を、大陸のものと比較する点で、大そう重大なものであつた筈だ〉とか〈山に入り俗界を離れるといふのは、仏教のイデオロギーと別に、やはり土俗として、何か大そうな力で個人の血の生理の中にさへあつたといふ事實は分大へんなことだ〉といった示唆的な指摘をしている。

(2) 「他界に対する観念」(『国民之友』一八九二・一〇・一三、一〇・一三)には以下のような記述がある。(物語時代の竹取、謡曲時代の羽衣、この二篇に勝りて我邦文学の他界に対する美妙の観念を代表する者はあらず。而してこの二篇の結構を検し、その仙女の性質を察するに、両者共に月宮に対する人間の思慕を化体せしに過ぐるなし。竹取の仙女は人界に生れて人界を離

れ、羽衣の仙女は暫らく人界に止まりて人界を去れり、共に帰るところは月宮なり。蓋し人界の汚濁を厭ふの念はいかなる時代にも、いかなる人種にも抽くべからざるものなるが故に、他界を冥想し美妙を思欲するの結果として心を月宮に寄するは自然の理なれども、この冥想この觀念の月宮にのみ凝注したるは我文学の不幸なり。月宮は有形の物なり、月宮は宇宙の一小部分なり、人界に近き一塊物なり、その中には自在力あらず、その中には大魔力あらず、無辺無涯の美妙を支給すべきにあらざるなり。故に月宮を美妙の觀念の中心としたる我文学は（前述二篇に就きて曰ふ）一神教國に於ける宇宙万有の上に臨める聖善なるものを中心として万有趣味の觀念を加へしめたるものに及ぶ能はず。

(3) 十川信介は「ドラマ」・「他界」明治二十年代の文学状況（筑摩書房、一九八七・一一）の中で、明治二十年代の他界を代表する空間を三種に分け、（第一は嵯峨の屋の「天」または「月宮」、第二は透谷の「蓬萊山」、第三は異界とも呼ぶべき露伴の怪異の世界である）と述べている。

(4) ▲幽冥▼は、本居宣長の▲黄泉の国▼の説、すなわち人間は死ねば善人であろうと悪人であろうと皆さたなく汚れた▲黄泉の国▼に行くほかないのだという考えに反対する形で唱えられた。

二 ▲仙界▼から▲魔界▼へ — 幸田露伴の「新浦島」 —

幸田露伴の「新浦島」〔国会〕一八九五・一・三一・三〇〕は、浦島太郎の弟の百代目の子孫浦島次郎の物語である。〈人品気高く才智逞しく生れつき〉〈自然なる学問好き〉の次郎は、ひなびた漁村に年老いた両親を残し、学問への志を抱いて京都へ出ていった青年である。京都での次郎は、七条三位の女に恋せられたものの彼女は浮橋四位の若君に嫁し、続いて彼の姫に似た町家の娘に恋したが、その女も病死。その後瓢六という狂歌師と遊里の経験も積むが、計算高くさもしい女にも愛想が付き、一念発起して東京へ上る。そこで彼が見たものは……。

ほとく世間一般の人が餓鬼か畜生とよりほかは見えず、学者が世間の鼻息を覗ひ、紳士が落語家幫間の真似をして悦び、寺を建立した人を奇特なおもふて見れば幾千人を泣かせた悪名消さうとて高利貸しのする業、皇国のためとえらさうに集まつた人が此の公債の利子が四分と定つても六分と定つても大分濡手粟の仕事があつたものを、惜しいことに

五分と平に定つたで動揺が足りぬと腹では呟き、経済が紊乱せねばどかまうけが無くして詰らぬと啣ち、去年の旱がもう一層強かつたら好かつたものと溢し、坊主が訴訟事ばかりして、王法を擁護すべき筈の仏法をもつて王法の孫庇借りて余命を継ぎながら高慢顔ばかり昔時の如く、嫉妬偏執俗人より烈しく、口頭法論腹貯金、保険の無尽のと現世の世話焼には能く手がまはり、華士族平民、吏農工商どれからどれまで陰險諷猾奢侈情弱の風に染むもの多く、……

東京に失望して再び京都に戻つても、ここもうるさく、ついに次郎は（優れたる人の先を争ひあひてむづかしげに騒ぐ世の中に交りて生活すも心憂くなりたれば御膝下にまゐりて魚釣り岩海苔採りに一生を送りたく、頓て近日伺ふべき間まづ差送り候荷物御受取り下され度」という手紙を出して帰郷することになる。翁と嫗は次郎を喜んで迎え、いよいよ家を譲ろうとするが、その際、翁は初代次郎の兄浦島太郎が龍宮から帰つた後の様子について、次のように述べる。

さて其老耄れた浦島殿は其時忽ち心に悟つて、其から曲つた腰を伸し／＼磯に居た漁師に老釣竿を貰つて杖とつきながら、近江路美濃路と段々に名山を搜して信濃にかゝり、信濃の寢覚の床といふところに止まり、龍宮の榮華も覚むれば一夢の痕無く香無く、人間の富貴も融けぬ間の氷柱を彩り雪丸に刺繡するばかりと観じて静に岩窟の主人となり済まし、餓えては樹葉草菌に、渴いては石の罅隙の真清水に惜しからぬ身を委ねて居られたさうなが、其中にとう／＼仙人と成り上つて日の出る国から日の入る国まで、雲の上の世界から地の下の世界まで一眼に見るやうになり、岩の中にも透り霞の上を遊ぶやうにもなられて、通力自在の身の心安く世を送られたが、仙人になつても縁には牽かれるものと見えて復龍宮へ渡ると定つた時、杖にした釣竿の截端に手紙を封じ込んで彼の玉手箱に添へ、召使ひの仙童に持たせて、吾が肉親の弟の九世渡に居るといふことを天眼通で見られたにより、此方の先祖殿に置土産として、而して龍宮へ行かれた限り其後は知れやう筈もないが、……

神仙の世界である龍宮から帰つた先祖浦島太郎は、あらためて山中に入り、修行を重ね仙人となつて再び龍宮へ行つたわ

けだが、そのことを明かした翁は、家宝の玉手篋と譲り状とを次郎に引き継いで、翌朝、娘とともに（臥したるまゝ、生けるが如き面して既其魂は天に昇りし）ということになる。このとき、翁と娘の亡骸は（戸解の仙人権者の化現のやうなる奇瑞）を示す。すなわち、着ていた衣服、履物だけを残して、死体が霞か雲のように消えてしまふのである。ここで次郎は、先祖の浦島太郎だけでなく自分の両親も実は△神仙▽の境地に至っていたことを知る。そして彼もまた、△神仙▽の道をたどろうとする。しかし、父母が残っていた紅白二顆の舍利どちらを掴むかによって自らの進むべき道を占ってみると、自分には△神仙▽の道を進むことはできないという結果が出てしまう。そこで次郎は、△神仙▽にあるからは悪魔も必ず有る理なり、人生魔に逢ふもまた風流、我魔道に墮ちん心は無けれど魔にも通力ありと聞けば、願くは先づ魔道を修して魔王と朋友交際をなす身にも至らば其上にて心易く仙となり仏とならん」と考え、△仙界▽から△魔界▽を目指すのである。

一見矛盾するかに見える△仙界▽から△魔界▽への転換。しかし、この△仙界▽と△魔界▽とは決して二項対立的に存在するものではなく、むしろ表裏一体の関係にあるものなのだ。

次郎は万巻の書を読破し、ついに軍荼利明王の秘法を会得して、聖天毘奈耶伽王を呼び出すことに成功する。（内に在りては外に聞き、外に在りては内に聞き、暗きに居ては明らかなるに見、明らかなるに居ては又暗きに能く見る毘奈耶伽王とは我なるぞ）と唱えつつ出現した大魔王は、次郎の浅慮を嘲つて次のように語る。

思へ愚者、什麼善、なに悪、十善を修せざる魔王なく、天地を私せざる神仏無し、仏と云ひ又魔といふも戯論空語に過ぎざるぞ、聞け一切法は唯言語名句あつて真実無し、忘れよ世間の言語名句を、捨てよ汝の思慮分別を、

善と悪にせよ、仙界と魔界にせよ、△言語名句△の違いでしかなく、△愚者△である人間は、そうした△言語名句△の差異によつて成り立つ世界、△戯論空語△の世界を生きるしかない。むしろ、人間も△言語名句△の差異によつて成立する存在なのかも知れない。だから、大魔王は、次郎を脳天門より斬つて二片とし、その右方を次郎の分身、内面の声の担い手で

ある〈同須〉として、この世に残していくのである。次郎の命令ならば何でも実現する通力を持った〈同須〉は、次郎の意に従つて、美男美女の侍者達、宮殿、美酒、酒肴を準備するが、それらはすべて〈儉み物より成れる〉〈栄華〉でしかない。その事実を知った次郎はすべてを元に戻し、再び元の苦屋での生活に帰ろうとするが、この時〈同須〉は、次のように述べる。

不仁不徳と仰せられるれど意欲の前に何の仁か之あるべき将何の徳かこれあるべき、(中略) 仮令我等に通力ありとも縁無きところには威及ばず、たゞ縁あれば即ち入り、因あれば即ち助けて彼等に憂き目を見するのみ、因縁彼等の能生なれば彼等の受くる辛酸悲苦は実に我が与ふるものとしも無し、

〈同須〉の言は、次郎の深層に潜む無意識の声である。一見理想主義者の次郎が深層に抱え込んでいる現実主義的側面を代弁している。

さて、次郎が、九世渡の苦屋に帰り、〈昔時ながらの浪のじよばつく音〉を聞きつつ眠っていると、往時の馴染みの遊女勇菊が現れ、〈御なつかしうござりまする次郎様、はるく苦勞をして来たものを好う来たとも仰らず御逃げなされうとは何処までも酷い為され方〉と膝に取り付き泣き口説く。困り果てた次郎が、〈同須〉を呼んで処置を頼むと、紅蓮澗の澗水に浸して化石にしてしまふ。怒った次郎が、〈殺さんとせば汝は頼まず〉と言うと、このままにして三年損傷せずに置けば蘇ると言う。しかし、次郎は、〈他の意思知覚を奪ひてあらんことは我が快しとせざることなり、さりとて外に手段も無けれど兎に角女めを旧の如くにして与へよ〉と命じ、一方で女の意識が蘇った後の煩わしさから逃れるために、ついに自身を紅蓮澗の澗水に漬けることを〈同須〉に命じる。こうして、浦島次郎は、〈同須〉に見守られながら〈今に化石せしま、静に生死の外に在りとぞ〉ということで、物語は閉じられる。

次郎が〈生死の外〉という宙吊りの状態に置かれたまま、という結びは、きわめて暗示的だ。先祖の浦島太郎同様、鄙

びた辟村で暮らしていた父母は△仙界▽に達することができた。△仙界▽は何気ない俗に紛れた姿で存在したのである。だが、都塵にまみれた次郎は△仙界▽に行き着くことはできない。かと言って、大魔王や同須の棲む△魔界▽にも安住はできない。いずれも幻視の世界でしかないというわけだ。

注

(5) この結末については、川村湊が「蓬萊と魔界——明治文学の神仙世界」(『幻想文学』第十八号、一九八七・五)において、(浦島次郎が結果として「生死の外」という、一種の中有の世界にとどまり、そこにおいて「今」を経過しつつあるという結語が語られていることは、一読して感じられるような、物語作者としての露伴の巧みなオチの付け方ということだけではなくて、「神仙」の世界と、「魔」の世界との両極に引き裂かれた「近代人」としての浦島次郎にとつて、そのような中間的な立場しか彼には許されていないことを表しているのである)と指摘している。

(以下次号)

(おぐら・ひとし／教授)